三枝壽勝著　沈元燮訳

『三枝教授の韓国文学研究（韓国語）』

（ソウル：ペトゥルブック）

日本で韓国近代文学を研究している学者はそれほど多くはない。その中でもいわば第一世代に該当する研究者にあたる者はわずか数人しかいないであろう。この本の著者はその中の一人である。今回韓国で氏がこれまで韓国近代文学について書いた論文および評論などを集めた、『三枝教授の韓国文学研究』という本が刊行された。この本に掲載された一六篇のうち八篇は氏が自から韓国語で書いたものであり、残りの八篇は本学に留学し学んだことのある韓国文学研究者の沈元燮氏が翻訳をしている。出版後、韓国の日刊紙『朝鮮日報』『ハンギョレ新聞』『京郷新聞』『世界日報』や『出版ジャーナル』また韓国評論家協会機関誌『韓国文学評論』などがこの本を取り上げ話題にしている。

この本に序文をよせたソウル大学の金允植教授は、「韓国近代文学を専門にしている外国人学者の中で三枝教授のように自分の立場がはっきりしている学者を、私はいまだ知らない」と言っている。また、この本の翻訳者の沈元燮氏は「日本で唯一韓国文学史が書ける研究者」として著者を評価している。さらに『京郷新聞』に書評を書いた文学評論家のキム・ソナク教授（東国大）は要約すると次ぎのようなことを述べている。

三枝教授の論文や評論に意味がある理由は、彼が日本で唯一韓国文学史が書ける研究者として評価を受けているからであるとか、彼が韓日両国語で自由自在に執筆できる批評家だからとかではない。それよりも、韓国文学をそれ自体独立した文学として理解し、研究しようとする彼の研究態度にこそ意味がある。外国のほとんどの韓国文学研究者たちは、どのような意味にせよ自分の国の文学と韓国文学との相関関係の中で研究を進めている。つまり、韓国文学を、自分の国の文学に対する異質な別の実体として認識しようとしている。三枝教授はこのような立場から完全に離れている。彼は韓国文学が文学として位置付けられる本質が何であるかについて韓国文学それ自体の成長論理の中で精密に分析している。もしこの本に三枝教授の名前さえついていなければ、韓国人学者の韓国文学研究だと勘違いするほど、彼の研究は外国人の韓国文学研究として考えられている通念を越えている。

以上のような指摘こそこの本に表された著者の研究についての正確な評価だと思われる。研究、特に文学研究のような主観的な分野は、様々の意味で自分自身の立場が研究の出発点になるといっても過言ではない。それは理非を論じる以前の問題であって、そのような立場からなされる研究が全く価値のないことだとは言いにくいとはいえ、一方そのような立場からなかなか離れ難いことが研究の限界であることは認めざるを得ない。ところが、著者の研究はこのような一般化している限界を越えており、そのことはこの本をみれば一目瞭然である。

従って、「外国人としての日本人の韓国文学研究が何か、彼等の韓国文学研究は韓国の我々にどのような意味を持つのかを改めて考えさせられる」というキム・ソナク教授の感想には筆者も同感である。また、この本に掲載された著者自らの書いた文章の独特で流麗な文体については、韓国語の母語話者である筆者としても驚くばかりである。

日本人の研究者による韓国文学研究または韓国研究は、たとえ氏のような立場からなされたものでなくとも、韓国での韓国文学研究および韓国研究には大いに刺激になる。逆の場合も同様だと思われる。それにもかかわらず、今までの交流は極めて限られた範囲でのみ行われてきたのが実情である。一番初歩的な問題は言語の壁である。日本の研究者にはない言語の壁が日本語を解さない韓国の研究者には深刻な問題である。現在、日本の大衆文化が続々と翻訳され韓国に紹介されている。それに比べると学問的な分野での翻訳はそれほど活発ではない。三枝氏の研究を翻訳したこの本はこうした点でも重要な起点になるであろう。

（厳基珠）